「日英対照言語学」授業実践報告
―言語観の変容を促す授業を目指して―

縄田裕幸*

Hiroyuki NAWATA
A Practical Report on “Comparative Studies in English and Japanese”：
Toward the Development of Linguistic Awareness of Prospective Teachers

１．はじめに

本稿では，島根大学教育学部言語教育専攻において筆者が担当している「日英対照言語学」の概要と，その授業実践の一端を報告する。本科目は専攻共通科目群「言語コミュニケーション論」に含まれており，言語教育専攻国語教育コースおよび英語教育コースの必修科目となっている。すなわち，将来の国語教員・英語教員である学生たちに比較言語学の観点から日本語と英語の言語的特性を説くというのがこの授業の趣旨である。

はじめに，この科目が国語教育・英語教育両コースの必修科目として設定されていることの意義について触れておきたい。それは一言でいえば，日本語・英語といった個別言語を超えた「ことば」の視点で言語教育をとらえ直すことである。高等学校までの国語・英語で用いられている文法用語や分析の枠組みは必ずしも互換性を持っていないが，言語学的な観点から見れば，両者は自然言語としての共通の基盤の上に成り立っている。どこまでが同じでどこからが違うのかを知ることによって，英語・国語の教員はみずから専門とする言語をより深く理解することができるはずである。

この授業は専攻共通科目として１年次後期に開講されており，受講するのは専攻に配属されたばかりの学生である。そこで高等学校までの国語・英語という個別言語の枠組みから彼らの視点を解放し，言語観の変容を促すことがこの授業の大きなねらいとなる。以下，この視点から「日英対照言語学」の取り組みについて紹介する。

２．授業の概略

まず，シラバスに記載された授業のねらいとカリキュラム上の位置づけ，さらに授業内容を引用しながらそれらに対する授業者の意図を述べていくことで，この授業の概略を紹介したい。

２．１．授業のねらい

本科目のシラバスに記載された「授業のねらい」は下記の通りである。

（１）この講義では，ことばの背後に隠れた様々な規則性を取り出し，それらを説明するための考え方や方法論を紹介します。このような作業を通してことばや文法に対するこれまでの常識を様々な角度から見直し，日本語および英語をより広い視野から考えるためのきっかけを与えるのがこの授業の目的です。

ここに記載された内容は，次のように整理することができる。

（２）a．言語学の基礎知識の習得　（知識）
　　b．メタ言語意識の活性化　（技能）
　　c．文法に対する否定的印象の払拭　（態度）

半期15回の授業で言語学のすべての領域について概観することは不可能であり，また教員養成課程のカリキュラムにおいてそのことは最優先に満たすべき事項ではないと思われる。そこで（２a）の知識に関しては，受講生が将来国語教員・英語教員として教材研究をする際に参考となる項目を精選して取り上げている（具体的内容に関しては２．３節を参照）。

また，この授業で特に意識しているのが（２b）のメタ言語意識の活性化である。これは言葉を意識的に把握し，分析できる力のことである。国語・英語の教科内容には言葉のはたらき，いわゆる文法に関する項目が必ず含まれており，そこでは生徒の言語意識をいかに活性化させるかが重要な鍵となる。また，小学校外国語活動でもその内容として「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに，日本語との違いを知り，言葉の面白さや豊かさに気付くこと」が含まれているが，これも児童のメタ言語意識の活性化をねらったものである。そのような教科内容を適切に教えるためには，まずは教員自身がみずからのメタ言語意識を活性化させ，それに基づいて教材を分析・開発することが不可欠である。

しかしながら，その前提となるのは，教員自身が言葉を観察し，分析することを「面白い」と思える態度を持っていることである。これが（２c）の観点である。残念ながら，現在の学校教育では国語・英語ともに文法を暗記の対象として教える習慣が根強く残っているように思われる。そしてそのような教育を受けてきた学生たちも

* 島根大学教育学部言語文化教育講座

また，「文法は暗記するもの」という言語観に大きな影響を受けている。そこで，この授業ではそのような学生たちの言語観に変容を促し，「言葉は面白い」という実感を持てるような言語現象を取り上げることを心がけている。

２．２．カリキュラム上の位置づけ

シラバスではカリキュラム上の位置づけについて下記のように記されている。

（３）この授業は，言語教育専攻における日本語学および英語学に分類される科目の最も基礎となる科目です。とりわけ「意味から考える英文法」「構造から考える英文法」では，この授業の内容が前提となります。また文法指導の方法論については「英語科教材研究Ⅰ」とも密接に連動しています。

この授業は教育学部言語教育専攻の共通必修科目となっている。したがって当然のことではあるが，授業を担当する筆者が所属する英語教育コースの学生ばかりでなく，国語教育コースの学生にとっても資する授業を目指している。２．１節で挙げた３つのねらい（言語学の基礎知識の習得，メタ言語意識の活性化，文法に対する否定的印象の払拭）は，国語教育コースの学生が２年次以降に履修する日本語学の授業でも役に立つはずである。

２．３．授業の内容

本授業の全15回の内容は下記のような順番で配列されている。

（４）第１回：オリエンテーション
第２回：母音と子音の発音
第３回：音素と異音
第４回：音節構造
第５回：アクセントとリズム
第６回：形態素と語形成
第７回：語形成と文構造の接点
第８回：文の情報構造（１）：後置文を中心に
第９回：文の情報構造（２）：受け身文の比較
第10回：形式的制約と機能的制約
第11回：語の意味と比喩表現
第12回：命題とモダリティー
第13回：談話構造と文章表現
第14回：言外の意味と協調の原理
第15回：まとめ

各回は独立したトピックを扱っており，１回の授業で各内容が完結するようになっている。また，トピックの選定にあたっては中学校・高等学校の（特に英語の）教科内容と関連するものを優先している。具体的には，英語の発音指導に欠かせない音声学・音韻論に４回分の授業時間を充てるとともに，文構造に関しては形式統語論の議論は最小限にとどめ，代わりに機能的統語論（情報構造）に２時間を割いている。これは，中・高の英語科での文の交替形（いわゆる「書き換え」）の指導において，情報構造の知識が教師にとって必須と考えられるからである。

また第２回から第14回のトピックの配列に関しては，音声学・音韻論からスタートした後に形態論・統語論を経て，最後に発話の場を扱う語用論へと至るというように，小さな言語単位から大きな言語単位へと推移する構成をとっている。こうすることで，学生は言語が様々なレベルからなる多層的なモジュール構造を持っていることを理解するとともに，各レベルにおける日英語の距離を意識することができる。例えば音声面に関しては，英語が閉音節言語であり強勢に基づくリズムとアクセントを持つのに対し，日本語は開音節言語でありモーラに基づくリズムとピッチアクセントを持つというように，両者の違いは大きい。ところが形態論のレベルになると日英語は相違点よりは類似点が多くなり，ともに「右側主要部の原則」にしたがって複合語や派生語を作ることができる。また一般に「英語は言いたいことを先に述べ，日本語は結論を後回しにする」と言われることがあるが，これは談話のレベルの話である。より小さな文の単位では，両者とも旧情報が文頭に来やすく新情報が文末に置かれやすいという特徴をもつ。このように日本語と英語を言語モジュールごとに比較することが「英語は○○で日本語は○○だ」というような素朴な印象論からの脱却を促し，ひいては学生の言語観の変容につながるものと思われる。

３．授業の実際

では次に，授業実践の一端を紹介することによってこの授業が目指している「言語観の変容」の具体的な中身を抽出していきたい。

３．１．題材の選択

学生のメタ言語意識を活性化させその言語観を変容させるためには，授業で扱う言語材料の選択が非常に重要である。この点に関して心がけている方針を２点述べる。

第一の方針は，なるべく身近な言語現象を取り上げてそこにひそむ法則性に気付かせるということである。上で触れた「右側主要部の原則」によって形成された複合語はその好例であろう。例えば，「カレーコロッケ」はコロッケの一種であるが，「コロッケカレー」はカレーの一種である。当たり前の事実なのであるが，このことを指摘された学生は，その背後にある法則性―複合語では必ず右側の要素が種類を表すようにできている―に気付き，はっとするのである。その効果を高めるためには，扱う題材は文学作品からの引用等よりも身近な例の方がより説得力がある。以下に示すのは，当該の回におけるある学生からのコメントである（３．２節参照）。

（5）言語にはさまざまなしくみがあり，多くの場合一定の規則により成り立っていることを知りました。そもそも右側主要部の原則や連濁の現象は無意識的に自然に人間が作り出したものなのでしょうか。もしそうだとしたら人間には言語を使う唯一の生物として特別な力がありそうですね。

この学生は，右側主要部の原則の学習を通して，文法規則がある種の自然現象であるという気付きを得ており，確立された規則を暗記するものという文法観・言語観からの変容をみてとることができる。

教材選択の第二の方針は，中学校や高等学校で習ってきた文法に関する知識を「なぜ」の視点で問い直すということである。例えば，「テーブルの上に本があります」というときに，英語では以下の4つの語順が論理的には可能であるが，自然な表現は（6a, c）の2つである。

（6）a. There is a book on the table.
b. *There is the book on the table.
c. The book is on the table.
d. ?A book is on the table.

このことは情報配列に関する原則「旧情報はなるべく前方へ，新情報はなるべく後方へ配置せよ」によって説明される。この原則にしたがえば，定冠詞のついた旧情報であるthe bookはthere構文とともには用いられず，不定冠詞のついた新情報であるa bookにはthere構文が好まれることになる。また同じ原則により，give型動詞の与格交替現象や受動態と能動態の使い分けもごく自然に説明することができる。大学生であればよく知っている，一見したところ無関係と思われる複数の現象を統一的な視座で分析することにより，彼らの文法に対する見方が変わることが期待される。

3.2. 復習とフィードバック

この授業は基本的に講義形式で行われるため，授業者と学生の相互交流が不足しがちである。そこを補うために，毎回の授業の最後に復習のための練習問題がついたレスポンスカードを配付している。学生はこのカードを週末までに提出し，授業者は問題の添削と授業へのコメントに回答した上で翌週の授業で返却している。また授業内容についてレスポンスカードで質問があれば，翌週の授業で受講者全員に向けて補足説明を行うようにしている。

学期末の授業アンケートを見ると，学生にとってこの方式は毎回の理解度が確認できる点と，授業中に質問しづらいこともレスポンスカードになら書きやすいという点でおおむね好評のようである。自分の質問がgood questionとして授業中に取り上げられることも，一部の学生には励みになっているようである。また授業者にとっても，学生の理解度を確認しながら授業を進められるとともに，多くの学生が共通してつまずくポイントが分かり，次年度の授業でその点を改善した授業を行えるという利点がある。

3.3. 創作活動

この授業では第4回「音節構造」および第5回「アクセントとリズム」の回において，英語による俳句（English Haiku）を作る活動を取り入れている。第4回の授業では，まず学生に「英語では俳句の5・7・5をどのように数えるのだろうか」という問いを投げかけ，英語では音節が音の基本単位となっていることに気付かせる。そしてそこから，英語が閉音節言語であるのに対して日本語が開音節言語であること，日本語では音節ではなくモーラが音の基本単位となっていることへと議論を展開していく。これだけのことを理解した上で，第4回の課題として英語俳句を作ってきてもらう。以下は，今年度の授業で学生が作成したものである。日本語訳も学生が作成したものであるが，こちらも5・7・5音となるように工夫されている。

（7）Contrail in the sky
Goes directly with my heart
To my native place
飛行機雲
私の心と
ふるさとへ

次の第5回では，同じ5・7・5でも日本語と英語ではリズムが同じではないことを出発点として，日本語と英語のアクセントとリズムの違いについて考えていく。そして日本語では音を数える単位であるモーラがリズムの単位にもなっているのに対し，英語では音節ではなく強勢によってリズムが構成されていることを学ぶ。このように，英語俳句の創作は日本語と英語の音韻構造を比較するのに格好の教材となりうる。

4. おわりに

最後に，この授業の課題について述べておく。それは評価に関することである。この授業の評価は期末試験（90%）とレスポンスカードの提出（10%）によって行っており，そこでは提示された言語データを授業の内容に沿って分析・説明することが求められる。そこで実質的に評価することができるのは（2）で挙げた「知識」「技能」「態度」の3観点のうち「知識」と「技能」のみである。この授業で目指している言語観の変容は（2c）に挙げた「態度」の観点，すなわち「文法に対する否定的印象の払拭」に大きく関わることであり，この点をどのように評価に反映するかは，今後の改善を要する重要な課題である。